

進化する服／Progressive Dress

Dana Thomas

三宅一生はファッションの限界を押し広げることに生涯取り組んでいる。前向き思考のデザイナーはつねに、次のものを追いつけている。

ファッション界で最も実験的なデザイナーであり続けるひとり、三宅一生にとって真のデザインとは、われわれの装いを変えたり、家庭を美しく飾ったりすることにとどまらない。三宅にとってデザインとは、使う人の心を解き放ち、思考や感情をわき立たせることである。1965年パリに降り立った三宅はオートクチュールの勉強を始め、数年間はそれに取り組んだ。クチュール組合の学校に通う一方、正統のジャケットをつくり、正統のカクテルドレスをつくった。どれも非常に洗練されたもの、ブルジョワのもので、かくあるべき、というものだった。そして1968年、5月革命が勃発。フランスの学生たちは街を練り歩き、戦後の体制を意味するものごとくに抗議した。三宅にとってこの騒乱は、啓示だった。「限られた人のためでなく、たくさんの人々のために服をつくること、そこに未来がある、と思いました」三宅は言う。「ジーンズやTシャツのように、普遍的な服をつくろうと決めたのです」

それから40年以上にわたって今日まで、三宅は革新を続けながらも、普遍的、かつ身近なファッションを追いつけている。プリーツプリーズは彼の数ある達成点のひとつである。古代ギリシャのプリーツ・チュニックを思わせる美しいプロダクト衣服は、高価でなく、ケアもかんたん。今秋Taschen社より、プリーツプリーズ20周年に向けた本も出版された。そしてA-POC。一枚の軽いニット布地からつくられるA-POCは、購入者が自分ではさみを使って好きなスタイルをつくることのできる。

三宅がデザイン界に対して与えた影響は、極東の一島国から生まれたアヴァンギャルド・ファッションという狭い枠を、はるかに越えている。振付家ウィリアム・フォーサイスのダンスカンパニーのために衣裳をつくり、アップルの創始者スティーブ・ジョブズの代名詞でもある黒のタートルネック・シャツのつくり手

も三宅だ。(ジョブズは首周りや袖丈をミリ単位に到るまで細かく指示したそうだ。そして一度に百枚以上の注文をした。) 1999年、三宅は友人の中国人アーティスト蔡國強と共に取り組んだ。ひと塊に並べた三宅のプリーツ服の上に、蔡は龍を描くように火薬を撒いた。点火すると、炸裂した火花は瞬時のうちに布地に龍の文様の焼き跡を残した。三宅は自身をひとりのつくり手と見なしている。「アーティスト、と言われるのには違和感があります。私がつくった段階では、まだ半分。それを受け取った人が何年も使ってくれて、それでようやく、私のしごとは完成するのです。」

2007年、三宅は日本で最初のデザイン施設である 21_21Design Sight (「完全視力 20/20」からの命名) を、長年の友人安藤忠雄の力を借りて開設。「デザインは私たち日本人の生活の中のととても大事な一部です。なのに、そうしたすぐれた新しいデザインを見る拠点がなかった。いろいろな場所からやって来た若いデザイナーやアーティストたちが、デザインをとおして交流できるような場所が欲しかったのです。」つづけて三宅は言う。「創造力の未来は、伝統的な手仕事を、新しい技術を用いて現代化しながら受け継ぎ育てゆくことにかかっています。」まさにそのために、彼は Reality Lab を結成し、二年前にその第一弾となるプロジェクトを発表した。それが 132 5. ISSEY MIYAKE である。どのアイテムも、再生ポリエステルが使われ、まるで折り紙のように幾何学形に折り畳むことができ、使用しないときは折り畳んだ平面の状態でしまうことができる。

広島に生まれ育った三宅は、人を勇気づけるデザインの力を思わぬかたちで見いだした。7歳の時、疎開先の教室で原子爆弾投下に遭遇したのだ。「今日の自分をつくったのはこれこれの体験です、とどれかひとつを特定することはできませんが…」かつて三宅はこう語ってくれたことがある。「…はっきり言えるのは、私はつねに、過去を振り返るのではなく未来のことを見つづけてきました。」原爆投下から数年後、骨髄の病気にかかり、足を悪くしながらも、三宅は復興してゆく広島のなかでデザインの持つオプティミズムに力を得た。とりわけ、イサムノグチがデザインした平和大橋にそれを見いだした。「私は少年時代に偉大なデザインを知ることができました。欲望の対象物としてではなく、人々に使われるものとしてのデザインを、実際に身をもって体験し知る機会に恵まれ

たのです」

三宅は東京の多摩美術大学でグラフィックデザインを学んだ後 1965 年、パリに渡って服づくりを学んだ。そのままパリに留まり、オードリー・ヘップバーンやウインザー公爵夫人といった女性たちのために豪華なドレスを作っていたユーベール・ド・ジバンシーとギ・ラロッシュのもとで研鑽を積んだ。次いでニューヨークに渡り、しばしの間ジェフリー・ビーンの下で働いた後、1970 年、帰国し東京に自身の事務所を設立した。そこで彼が始めたのは、曰く「一枚の布からの服づくりという考え方、すなわち布地と身体のあいだの関係そして間（ま）の探求」だった。1973 年にはパリでコレクションを発表。そのコンセプトが革新的な衣服は、旧弊なパリのモード界に小さな革命を巻き起こした。

その後、ブランド設立以来 25 年以上にもわたって賞賛を得てきたにもかかわらず、三宅は自らのモチベーションを常に問いつづけていた。「フランスの伝統の中でトップ・クチュリエになるのではなく、普通の人々のための服づくり」に身を捧げてきたけれども、このままで本当によいのだろうか、と。そして 1999 年、コレクション製作を後進の若手デザイナーにバトンタッチすると、自らは新しいプロジェクトに専念した。それが、画期的なチューブ状のシームレス・ファブリックによる服づくり、A-POC（一枚の布 A piece of Cloth の略）である。手頃な価格のうえ、着る人が自らの好みやニーズにあわせて簡単にカスタマイズできるこの服が初めて発表されたのは 1999 年、パリのエコール・デ・ボザールでのショーだった。裁断される前の長い一枚のファブリック・チューブのなかにモデルたちが数珠つなぎになってステージに登場すると、場内からうねるような大喝采が沸き起った。この作品は衣服デザイナーによるインダストリアル・プロダクトとして初めて、ニューヨーク MOMA のパーマネントコレクションに収められた。

近年、三宅は数多くの賞に輝いている。2006 年には科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に大きな貢献を果たした者に授与される京都賞を、そして 2010 年には天皇陛下から文化勲章を授与された。さらに今年初めには、ロンドンのデザインミュージアムのファッション・アワードを 132 5. ISSEY MIYAKE が受賞した。これはケイト・ミドルトンのウエディング・ガウンや、メトロポ

リタン美術館で大成功を収めたアレクサンダー・マックイーンの展覧会「Savage Beauty」を制しての快挙だった。三宅はこれらの栄誉を誇りに思っているが、そこに甘んじてはいない。なおも若い世代と仕事をし、教育し、こう言っている。「好奇心をもちつづけること。世界を探求すること。伝統を大切にすること。テクノロジーを使って実験をすること。そして、現代という時代を考え、決して後ろを振り返らないこと」。長い仕事人生のなかでいちばん誇りに思っているものはどれか、と尋ねると、三宅は笑ってこう答えた。

「次のプロジェクトです」。